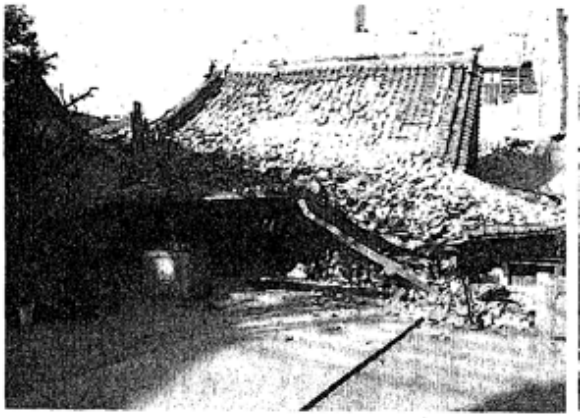
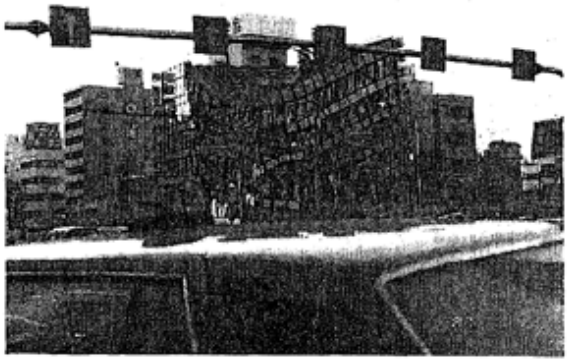
阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p8-9

平成7年

1月17日（火）　　『兵庫県南部地震』 発生
午前5：46





平成7年1月17日早朝、大きな揺れで眼を覚ます。「大きいな」と思いつつ、隣室に寝ている妻子の様子を見に行く。数秒後、揺れは収まり、自室に戻って寝直し、2度目の揺れには気付かず。

朝起きた時、コードレス電話機が床に落ちていることを不思議に思う。既に地震の事は忘れていた。8時過ぎに、千葉浄青より「嘉禄法難念仏行脚」の実施についての問い合せの電話が有り、地震が有ったことを思い出すが、「予定通り行います」と返答。

テレビをつけてみると、長田区の大火の映像が流され、画面の下に死者10数名と出ている。「ひどい火事だ」と思いつつ、「たいした被害がなくて良かった」と感じていた。

9時にいつも通り、月参りに出掛け、帰りに塩竈近ブロ理事長（当時）の家に立ち寄り、翌18日に予定されている近ブロ理事会並びに大阪浄青役員との新年会の実施について相談する。

京阪電車が地震の影響を受けず動いていたことから「予定通り実施」と決定。（伊藤）

★

17日朝
真っ暗な空（火事の煙りによって）鳴り止まぬサイレンの中、寺の近所の檀家のおばあさん宅に向かう。倒れた電信柱、道に飛び出してつぶれている家、裸足で呆然と立っている人達。その中を進む。家はつぶれている。声をかけるが返事がない。何度か呼びかけてみるが人の気配がないので、無事を祈って次に向かう。何戸かまわる。助け出されたと聞くと安心する。ダンボールに「家人無事」とあるところもあっ

た。あちこち見て傾いた寺に帰る。
　午後、長女が「小学校が大変だ」と言う。次々と亡くなった人達が運ばれて来るという。急いで線香とろうそくと香炉を紙袋に入れて学校に向かう。教室が霊安室となり、泣き声が聞こえてくる。
　「近所の浄土宗のお寺の住職です。亡くなった方への回向をさせて頂きにまいりました。」と声をかける。何人かから声がかかる。名前を聞きお経をあげ回向をする。一人また一人と回向する。「こちらも」と声がかかる。同じ家の人である。一家で3人を亡くされた。2階はいっぱいになったため3階に運び込まれていく。壁土で泥だらけの方、痛ましい傷で亡くなったように思われる人、寝ているような方。なんとか回向をすませ寺に帰る。
　これが、多分、私なりの活動の最初だと思う。（高倉）

★

　拙寺は、阪神・淡路大震災の前兆現象といわれた、猪名川地質の震源地の近くに在り、平成6年11月初めから、約1ケ月の間、局地的な直下型地震に悩まされていました。しかし、同年12月にはその揺れもおさまり、落ち着いた生活をとり戻しつつありましたが、その矢先、平成7年1月17日午前5時46分、あの忌まわしい大地震に遭遇したのです。
　あの日は、拙寺の檀家さんが亡くなられ、午前4時頃にその連絡を受け、明るくなったら枕経へ上がろうと、五重相伝の血誓帳や過去帳をひろげていた時のことでした。ゴーッという今まで聞いたこともないような大きな地鳴りが聞こえてきました。その瞬間「これは、マズイ！」（度重なる猪名川地震のせいで、地鳴りの音の大きさで、地震の規模が分かるようになっていたため）と直感しましたが、すぐに、ドーン、ドーンと下からつき上げるような大きな揺れが2回有り、動くこともできないうちに、ユッサ、ユッサと大きくゆっくりした横揺れに、天井が波打ち、家中が大きくきしみ出しました。いつ揺れが止むのだろうと思っていたら、今度は更に激しく、家中をかき回わすような大きく速い揺れに襲われ、「もうダメだ。家がつぶれる！」という思いで天井を見上げていました。妻や子供たちのことが頭をかすめましたが、一歩も動くことができず、目の前のストーブも消すことすら思いつきもしませんでした。あまりの揺れの激しさに、日頃の心の準備もどこかにふきとんでしまったというのが実情です。
　どうにか揺れもおさまり（とてつもなく長い時間に感じられた）、家族も建物も無事みたいなので、まわりの様子を見ようと外へ出ました。格別に変わった様子もなかったので、安心して家へ戻り、地震の情報を掴もうとテレビをつけました。「いくら田舎（猪名川町）でも、これ位揺れれば、テレビでも何が言うだろう。」と思っていたら、意外なことに、通常の番組をやっており、地質のことは何も放送していません。ようやく、午前7時頃になってから、「神戸地方で強い地震があった模様です。亡くなった方が2名。」と第一報が伝わってきました。「震源は神戸？」てっきり、猪名川地震の大きなやつが来たと思い込んでいたので意外な感じがしました。神戸方面が震源で、かなり離れた猪名川町でこれだけの揺れがあったのだから、神戸はえらい事になっているだろうなと思っていたら、それから後は、時間を追うにつれ、目を疑うような悲惨な情況がはいってくるばかりでした。（生水）

★

　何が起ったのか、初めはよくわからなかった。自分の体がまるでカクテルを造るシェーカーの中にいるような感じであった。木のきしむ音や、ドスンという鈍い大きな音、今まで聞いたことのない物凄い音がした。ともかく、家内と子供の所へ這って行き、両手で2人を覆っていたようである。ワーワーと意味不明の言葉を発していたようだ。もう少し揺れが続くと最期かなと思った。しばらくしてどうも地震の様だ

とわかる。子供の寝ていた横の襖を開け様とすると開かない。何かが引っ掛かっている。タンスだった。タンスがこけて襖で止っていた。あと数センチで子供の足だった。真っ暗な中、懐中電灯を取りに台所へ行こうとすると、何かが月明りで光っている。よく見るとそれは、茶箪笥から様々な食器が飛び出し割れた破片が光っていた。台所へは入れないので、本堂のローソクを取りに行くことにした。手が震えている。寒さなのか恐怖なのか。本堂では如来様や両大師はビクともしていなかった。荘厳類は殆んどこけていた。月明りの中、阿弥陀様のお顔を見てほっとした。

母の様子を見て、また庫裡の2階へもどった。ローソクの明りで家内と子供の顔を見て安心する。どれ位の時間が経ったのだろうか。何かをしなければと思いつつ、じっとしていた。

夜明け頃には、家内の気遣う声を背に外に出てみた。隣の寺の墓がまる見えだった。塀が全部こけていた。墓もこけている。近所の人達もソロソロ出てきた。「大丈夫でしたか、ものすごかったですね」と顔は微笑んでいるが体は震えていた。尼崎は比較的早く電気が回復して、すぐにテレビをつけて状況を把握できた。

1月17日午後、拙寺の総代が亡くなられたと知った。全く電話が通じなくて、近所の方から聞いた。まさかと思いつつ、総代の家へ行った。家の形はなく、ただ二棟の蔵と最近建られた門だけが残っていた。仏間も、客間も、玄間土間も、どこがどこかわからない状況であった。普段、総代が寝ておられた近所が一番壊れており、大きな梁や棟木が幾重にも重なり合っていた。夕刻には、病院より仏様がこられた。納棺に立会いお手伝いをした。仏様は、全身打撲の跡だらけで辛かった。住職として、しっかり親代の最期を見届けようと思った。お念仏の声が声にならなかった。辛かった。何故か目の焦点が合わず、お顔がよく見えなくなった時に納棺は済んだ。その後、この総代のご尽力により、2年前に立て頂いた本堂に安置した。その時には、少し微笑んでおられるように見え、ほっとした。

この総代を始め諸々のお蔭で被害軽微で済んだが、西へ行けば行く程被害が大きくなっていると報道されていた。すぐさま関係のある所に電話をと思ったが全くかからず、ただハワイの従兄弟からの電話には驚いた。

一部『青年浄土』より抜粋（浦上）

(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p10-11

1月18日（水）　近畿ブロック理事会開催（大阪教区教務所）
午後2：00　・『兵庫県南部地震災害救援本部』を設置
・全浄青救援センターより委任を受ける。
・災害地救援基地を尼崎市常楽寺に設置

◇ 全浄青理事長として『近畿ブロック浄土宗青年会理事会』にオブザーバーとして参加。

◇ 阪神淡路大震災対策本部を近畿ブロック浄土宗青年会に設置。

◎ 問題点　救援センターの規定には、このような未曽有の災害での緊急救援活動を想定していなかったので、救援センター委員長と救援センター長と緊急協議して決定し、電話にて各委員との協議し活動に入った。

（神田）

★

1月17日、地震で目を覚ました。ちょっと尋常ではない揺れではあったが、まさかあのような惨事になっているとは考えが及ばなかった。当日は自坊に於いて早朝より檀信徒が集まり、一斉清掃の日で、テレビを見て来た人によって、大惨事の様子が伝えられ、その話で持ち切りであった。続々と伝えられる報道に、まず何が出来るか、近ブロとの連携は……と頭を巡らすも、寺務に追われ、瞬く間に1日が過ぎてしまった。

1月18日の近ブロ理事会には、自坊の都合で出席出来ず、教区会長として逸速く救援活動に参加できなかった。それどころか、1月18日から25日まで自坊の御忌会の法要に拘束されもどかしさの中に法務に追われる日々を送って行った。やっと26日以降、救援托鉢を教区内組浄青単位で行うという展開となった。ともかく行動を起こすことによって、何をして良いのやらというもどかしさから解放されたような気がした。（榎本）

★

震災の翌日に開催された理事会が今回の救援活動の出発点となった。たまたまその日だったと言われればそうだし、また私自身も会は中止になると思っていた程であり、同じ近畿に住みながら救援という意識は最初低かった（ひたすら反省）。ただ救援本部が設置され組織として活動ができることは個人で動くよりも広範囲な救援活動が可能になるため、この理事会で決議された内容は今後の展開に大きく貢献したと思う。そしてこの決議を受けて各教区浄青が動きだしたことは、近ブロ浄青という組織が健全に運営されていたことになろうと思う。また救援本部（事務局）を別に設置したことにより各教区間の調整・連絡がスムーズになったのではないだろうか。

問題は組織論であろう。規約により硬直化した各既存団体との交渉が救援活動に様々な弊害を生んだ。組織が活動を作るのか、活動が組織を創るのか。今後の課題であろう。

もし今後どこかで大災害が発生したなら、すぐに理事会を召集し情報の収集に努めることが必要であろうし、また各種情報や行動を把握するために別に事務局を設置することが望ましいと思う。（小林）

★

たまたま、偶然に平成7年1月18日（震災の翌日）に近ブロ浄青の理事会を大阪で予定していたこと、当時の全浄青理事長　神田上人が会議に同席されていたこと。この2点が、全国浄土宗青年会の救援センターに、災害救援本部を設置し、近ブロ浄青が担当するという組織だった救援活動ができた要因であろうと思う。ここに、会員個々の思い（何かをしてあげたい）がぶつかって行ったのである。素晴らしい活動が出来たと思う。胸をはって言い切りたい。確かに、組織としての活動をするにあたり、色々と問題点があった（活動費・派遣人員・保険・二次災害等）。

しかし、不思議とこれらの問題は解決していく事ができた。なぜなら、たまたまだからである。何かをしてあげたいと言う強い思いはあっても、何かをしなければと言う気負いは無かったからであろう。

理事会で京都の小林上人と奈良の松谷上人が口を揃えて言われた言葉「なんかしたいね」と、皆同じことを思っているんだと、嬉しかったことを覚えている。その後、災害救援活動の具体的な話のとき、大阪浄青が窓口になりますと言ったのも、先の嬉しさの余韻であった様な気がする。お蔭で、災害救援本部事務局をさせて頂いた。有り難い話である。

事務局には全国より多くの電話をいただいた。ある御寺院からは、自分の娘をボランティアに参加させたいとのこと、福祉の資格をお持ちとの事なので朝日新聞の福祉事業団に直接行くことと、神戸市と芦屋市のボランティア登録をお教えした。またある浄青の会員より、1泊2日で何かボランティアに参加したいとのこと、聞けばこちらに来るのに半日以上要るとのこと。よくよくお話して神戸までの往復の旅費を義援金にして送っていただいた。等、色々なお電話も頂いた。有り難い事である。

理事会後、新年会の代わりに連絡会として食事をした時の、焼肉の不味さは忘れることは出来ない。（山本）

18日予定通り理事会を開催

この時点では既に未曽有の大震災で有ることが判明していたが、「理事会を予定通り開催」と各役員に連絡済みで有ったため、また震災に対して何らかの行動を話し合うために、理事会を開催することにしていた。

塩竈近ブロ理事長（当時）と共に京阪電車とタクシーを使い、大阪教区教務所単信庵に到着。予定時刻になっても出席予定者の半分も揃わず、予定時刻を大幅に過ぎて少人数ながら会議を始める。

予定通りの議案

（1） 伝道活動

・一枚起請文の点字本及び録音テープ

・ポスター作成

・青少年教化資料作成

（2）研鑽研修会

（3）会員親睦交流会報告

（4）『近ブロニュース』通巻32号

（5）平成7年度総会及び研修会について

（6）　その他

について審議し、その他の議案として「兵庫県南部地震災害救援本部（仮称）」を設置し、災害救援活動を行うことを決議し、オブザーバーとして参加していた神田全浄理事長（当時）を交えて話し合い、「兵庫県南部地震災害救援本部（仮称）」を全国浄土宗青年会救援委員会の委員会として設置する事を検討す

る。
　予定の時間が過ぎ、大阪浄青役員との合同新年会へと向かう。時節柄、新年会を「災害対策会議」と名を改める。
　この席で、「災害の現状を把握するために誰か現地へ行く」事が決まり、小林京都浄青会長、小林、前田、秋元大阪浄青会員の4名が志願し、翌朝バイクで現地へ向かうこととなる。
・組織としての活動の実際と問題点
　たまたま地震の翌日18日に理事会を予定していたことと、近ブロ事務局のある京都の被害が少なかったことにより、近ブロ理事会において「災害救援活動」が行われることになったが、もし理事会が予定されていなかったら、もし京都が被災地であったなら、果たして同じ様な結果が出ていたであろうか。
　勿論、ブロック内の兵庫・大阪に大きな被害が出ていたから、何らかの「救援活動」を行ってはいたであろうが、6教区の浄青が連携して救援活動を行うようになるまでには、相当の日時を要していただろうし、その後の救援活動の内容そのものも大きく変わっていたのではなかろうか。
　また例えば、震源地が大阪南東部で大阪南部・和歌山北部・奈良西部・京都西部等の広い範囲に渡って大きな被害があったとしたら、各教区の連携した活動が可能であったかどうか。全て「もし」のつく仮定の話ばかりであるが。
　17日当日京都では、早朝は電話を掛けることも掛かってくることも可能で有ったが、9時過ぎ頃から全く不通となってしまった。地震の被害が殆んど無かった京都ですらそうであった。一方、携帯電話は殆んど平常通り使えたが、今日では爆発的に普及しており、あの日の一般電話と同じ状態となるだろう。（伊藤）

★

　役員会・委員会
　まず始めに阪神淡路大震災に際しての近ブロ浄青の速やかな対応と勇気ある行動に対して前全浄青事務局の一員として心よりお礼申し上げます。
　今回の全浄青の救援活動は過去に経験のなかった人的派遣という意味では、まさに1からの出発であり、様々な情報が入り乱れる中、文字通り手探り状態でボランティア活動を展開して頂きました。そしてこれらの様々な活動は、全て今後の救援活動のための貴重な資料となるべきものであり、近ブロとしての対応として考えた場合、精一杯の対応をして頂いたと考えております。
　今回の大震災で近ブロとして素早い対応が出来たのは、何においても18日に偶然にも理事会？が予定されていたからであり、もし開催されていなければ、かなりの立ち遅れが出たことは明白であります。言い換えれば、有事の際に素早く対応できる救援組織作りを各ブロック単位で早急に確立させる必要があると思われます。災害に対する全浄青組織としての対応には限界があります。その際に前線に立つのは実際に災害が起ったブロックであり、全国への発信基地としての役割も担わなければなりません。
　また今回の大震災で、各都道府県における災害情報対策はかなり前進したと思われますので、救援物資の搬送にしても前回の委員会で提案された物資の備蓄に関しては、常備することよりも物資の必要リストや販売店リストを製作しておくことのほうがより重要課題であると思われます。
　各ブロックにおける組織作りは13期のうちにしておきたかったのですが残念ながら間に合いませんでした。残念です。（大島）

★

大震災発生の翌日、たまたま近ブロ浄青の理事会が大阪の単信庵にて開かれ、それに出席。

同じブロックの兵庫・大阪が特に大きな被害を受けたということだが、情報網の混線により、詳しいことはその時点では殆んどつかめていない。とりあえず私たち浄青としては、今できることであれば何でもしていこうということになり、近ブロ浄青の中に「災害救援本部」が置かれた。

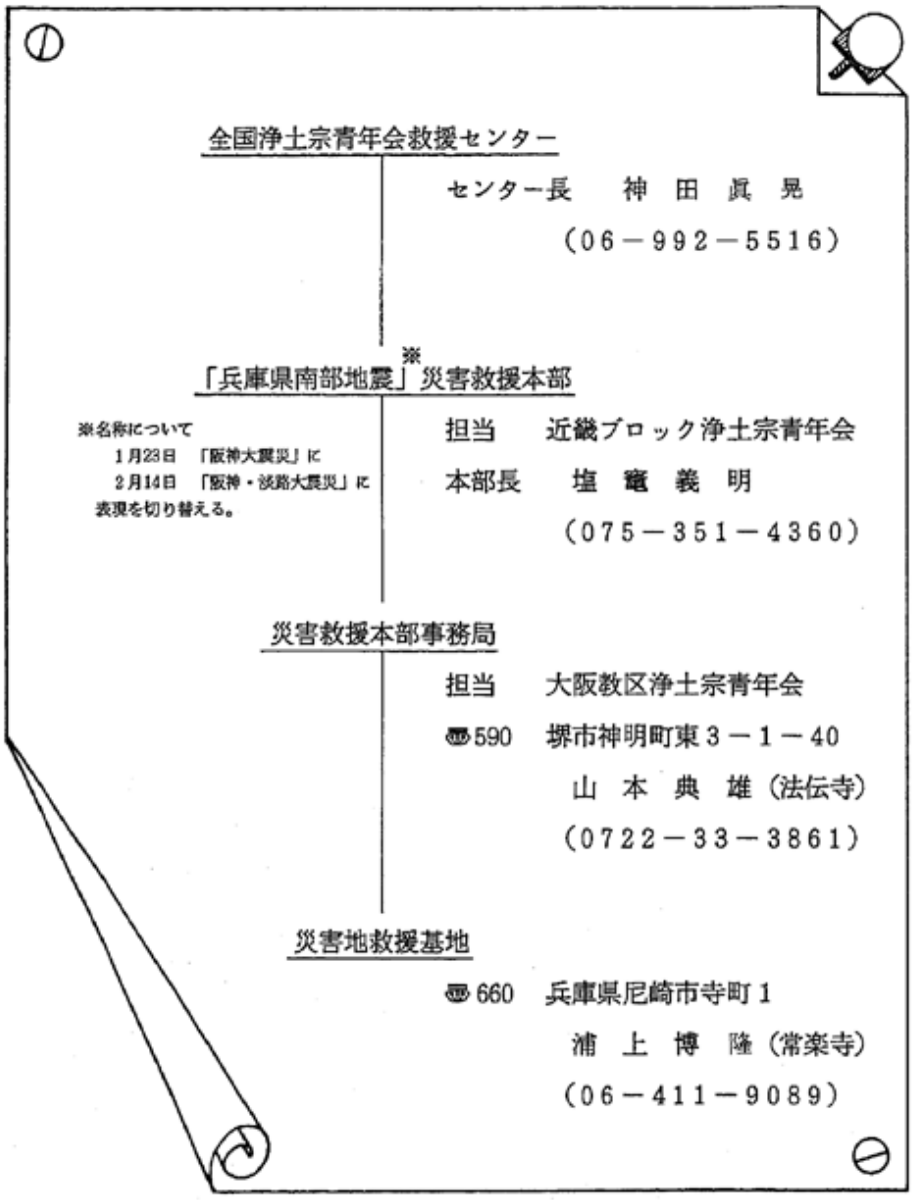
いつもは各教区とも特色があり、個性豊かな人ばかりの理事会で、なかなか意見の一致をみないのだが、この時ほど会のまとまりがよかったことはなかったと思う。みんなの素早い対応と行動力に目を見張らされ、理事会後の会食中にも様々な意見が積極的に出され、実に頼もしい会であることを再認識させられてしまった。

帰りのタクシーの中で、奈良浄青の行事もなるべく救援活動に切り替えることを、松谷奈良浄青会長と確認した。（山中）

(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p12-13

1月19日（木）　　災害地現状把握のため現地視察



全国浄土宗青年会救援センター

センター長　神田眞晃

（06－992－5516）

「兵庫県南部地震」※災害救援本部

※名称について
1月23日　「阪神大震災」に
2月14日　「阪神・淡路大震災」に
表現を切り替える。

担当　近畿ブロック浄土宗青年会

本部長　塩竈義明

（075－351－4360）

災害救援本部事務局

担当　大阪教区浄土宗青年会

〒590　堺市神明町東3－1－40

山本典雄（法伝寺）

（0722－33－3861）

災害地救援基地

〒660　兵庫県尼崎市寺町1

浦上博隆（常楽寺）

（06－411－9089）

救援本部の要請を受け、家族の不安げな見送りを後に被災地にバイクにて向かう。
しかし、多くの反省すべき点があった。

1．行く前に地図で地勢を把握しなかった
普段は高速を使うため道が分かりにくく、しかも夜になると停電のため真っ暗で、今いる所すら、またどちらに向かっているかも分からなくなった。
しかし、多くの家が倒壊しているので道はふさがり、また交通規制等のために走りにくく、ある程度自

分の勘に頼るほかなかった。

2．バイクが大き過ぎた
　通常400cc程度なら普通に運転できるはずが、京都から続く渋滞の中を走り、現地では道路の陥没や亀裂、段差が随所に見られ、バイクを押すことも度々あり、取り扱いに苦労した。できれば200ccまでのオフロードのバイクが良かったのでは。

3．もっと記録を
　カメラだけは持って行ったが、ビデオがあればもっと良かった。撮影し難い雰囲気はあったが、訴求力から考えればやはりビデオも欲しかった。また、もっとフィルムを持つべきだった。
　後には絶対にできない貴重な記録であり、これは他の救援活動時にも同じことが言える。

4．物をもっと持って行くべきだった
　バイクという制限があるが、持てるだけの物（今思えばアメ、チョコレート等の甘い物）を積めば良かった。現状が分からなかった事もあるが、悔やまれる。

5．本部への情報を素早く
　現地に入ると余りの凄じさに動転し、自分を見失ってしまったが、携帯電話等でもっと情報を送れば良かった。
　一刻でも早い救援活動ができたのではと思うと残念だ。

6．泊まるべきだった
　半日程度では無理があった。前項と合わせ、本部と連絡を取り合いながら、現地に滞在し、計画性を持って現地調査を行えば、あとの活動がスムーズにできたのではないだろうか。

　まだまだ多くの反省すべき部分はあるが、あの時にはあれ以上できなかった。また自分自身、余震等の二次災害が恐ろしかったのも事実である。ただ、行って良かったと思う。（小林）

　18日に理事会がなければ、19日に現地視察と言う話もなかったであろう。個人的に現地視察に出掛ける者がいたかも知れないが、まずその可能性はなかっただろう。事実、18日の時点では、誰も現地視察に行ってはいないのだから。
　個人的に知人、親戚等の見舞い、救援に出掛けた者からの情報と、マスコミの報道に頼るしかなかったのではなかろうか。（伊藤）

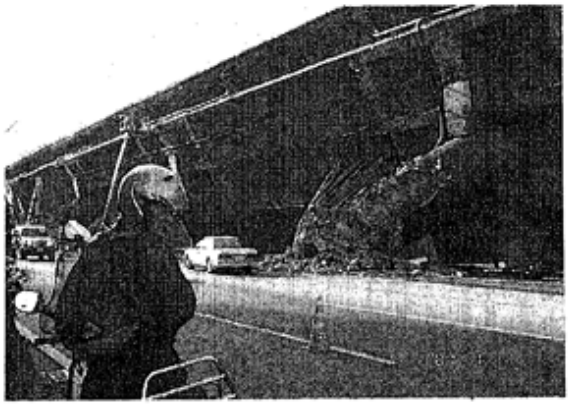
★

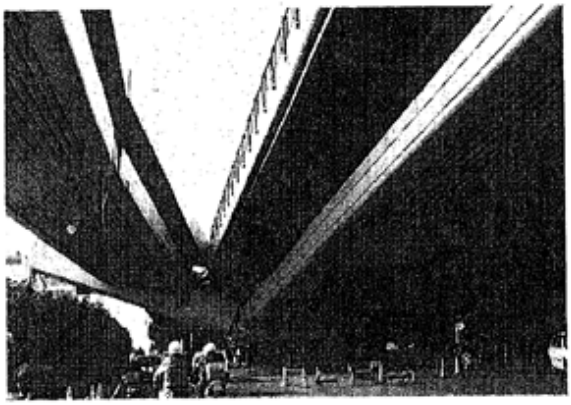
1月19日
◇ 現場調査の小林浩輝上人に携帯電話にて連絡をとる。
◇ 全浄青救援センターより義援金を神戸の市役所に届ける。（神田）

★

　現地視察

京都の小林上人と大阪から小林学典上人、前田上人、秋元上人がバイクで現地入りしてくれた。夜になっても中々連絡が入って来ないので、非常に心配をした。後、あの明るい性格の秋元上人がとても暗い声で連絡をしてきたのを良く覚えている。（山本）





(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p14-15

1月20日（金）　現地調査による、緊急救援物資を災害地救援基地に集積

21日（土）　マイクロバスにて救援物資配付

22日（日）　救援物資配付、浄土宗よりの救援物資配付に協力

災害救援物資一覧

大阪浄青

ブルーシート	47枚
ホカロン	480個
ナイロンテープ	4巻
下着（上下）	70着
ウーロン茶（2リットル）	20本
ジュース	130本
ビニール袋	たくさん
コンロ、ボンベ	2台
紙タオル	74パック
L L牛乳	120本
紙おむつ	4箱
電池	たくさん
タマゴ	4箱
ごみ袋	たくさん

奈良浄青

カイロ	2,770個
トイレットペーパー	240個
生理用品	640個
ウーロン茶とポカリスエット	10本
おむつ	864個
食パン	10個
お菓子	少々
靴下	少々
手拭い	少々
ポリタンク	10個

京都浄青

タマゴ	500個
防寒ジャンパー	100着
軍手	30ダース
おむつ	50ケース
ウェットティッシュ	50箱
生理用品	16セット
カイロ	240個
乳児用品（哺乳瓶等）	
電池（各種）	500個
育児用ミルク	150ケース
水	48本
ライター	20個
クレゾール	2本
バンドエイド	300個
牛乳	20パック

滋賀浄青

歯ブラシ	100本
歯磨き粉	100本
ウェットティッシュ	30箱
おむつ	50個

和歌山浄青

（1月20日和歌山港より物資輸送）

箱ティッシュ	400箱

カイロ	39個
缶詰	162個
清涼飲料水	37本
生理用品	67箱
電池	40個
紙おむつ	37箱
粉ミルク	7缶
ドリンク剤	数箱

★

各教区浄青が実に多くの物資を集め、また他の団体に頼らず独自で搬入できた。しかしあの混乱の中で、実際に活用されたかは不明である。某区役所前には終日大型トラックが数十台も荷下ろしを待っている状態があり、また大渋滞の中でもっと効果的に物資搬入ができなかったかと反省する。

前項の現地調査とも合わせ、被災他の各寺院を中心に物資を集積しバイク等で配る方法など、今考えればもっと寺院を活用すれば良かったと思う。

限られた予算や時間の中で、如何に必要とされる物資が調達できるかは非常に難しいが、今度の震災では、その内容を女性と子供を中心に考え購入したことで、他にない救援物資が搬入できたと思う。「事実、集積所では女性用品、粉ミルクの不足に悩んでいた。」（小林）

★

地震発生以後の近ブロの対応は、実に迅速機敏であった。連絡の取れない状態の中、バイクによる現地視察等、あらゆる手段を駆使しての活動が展開されたことには、全く頭が下がる思いである。あの連携プレーは、マニュアルの無いゼロからの出発とは思えない行動であったと思う。

第1次救援活動として物資の搬入がおこなわれた。和歌山からは陸路の搬入が困難と判断、2名の会員に委託して不足しているらしい物資を調達してもらい、和歌山港から船便で神戸へ搬入するという海上ルートを利用した。これはNHKテレビの和歌山局から情報を得てのことであった。

（榎本）

たまたま、浦上近ブロ副理事長の寺院が鉄筋で被害が少なく、前進基地として使わせて貰えた事が幸運であったと言えるだろう。また当然この救援物資搬入についても18日の理事会が無かったならばかなり遅れただろうし、行ったかどうかも疑問である。

事務局や各教区で色々な情報を入手しながらの物資購入であったため、確かにかなり役に立つ物資を搬入できたと思うが、反面、宗と知恩院の合同救援物資搬入に比べて立ち遅れてしまったのも事実である。

理想から言えば、17日早朝の大災害の報を受けて、17日の昼までには現地の情報を収集し、17日中に救援物資を持って出発すると言うことになろうが、果たして可能だろうか。（伊藤）

★

20日の昼過ぎ、京都の伊藤上人より救援物資を購入して、21日早朝、尼崎常楽寺様に集合との連絡が入る。ただそれだけの連絡である。何をどれだけ購入するのか、言われもしなければ聞きもしなかった。大阪浄青は私の独断で約30万円分の物資を購入した。たまたま自坊に30万円の現金があったからだ。思いつくまま近くの会員に連絡し、手分けをして買い物に走ってもらった。我々が手に入れた救援物資のベストワンは、ブルーシートであった様に思う。

各教区より集った物資は約150万円程のものだった。会員も20名程集った。ボランティアの語源は志願兵である。いま思えば、正にその通り20名の志願兵が被災地と言う戦場に、興味と不安と恐怖を持って入っていったのである。歩道を越えて車道まで塞いでいる崩れた民家、倒れた電柱、傾いたマンション、割れたガラス、ひっきりなしに走る緊急車両、サイレンの昔、両手に荷物を持って黙々と歩く人々、ローソソの入口に一列に並ぶ人々、パトカー、トラック、車、バイク、停滞しているけど誰もクラクションを鳴らさない。非常に静かである。そう感じた。町が死んでいる。いま思い出しても怖く恐ろしい。

何とか物資を届けた。辛く悲しいだろうに、精一杯の笑顔で迎えてくれた人達。また何かしてあげたくなる。けれど今は、早く家に帰りたい。また停滞、10分経ったが同じ場所。30分経ったが同じ場所。1時間経って5メートル進んだ。暗くなってきた。何かがおかしい、何かが、停電。どの家も真っ暗である。やっと武庫川を越えることが出来た。ネオンが輝いてる、至福になる。家に帰って風呂に入ると、急に恐怖がやって来た。

怖い、寂しい、悲しい、恐ろしい、けれど心の何処かで懐かしい様な、何かが動く気がした。多分私は、また志願兵になるだろう。（山本）

近ブロ浄青第1次救援物資として、18日に小林京都浄青会長、山本大阪浄青会長をはじめ、前線部隊が「災害救援本部」に細かな情報をもたらし、その後近ブロ内各教区浄青が救援物資を調達、直接配送。（山中）

★

1月20日

◇ 宗務庁に行って、浄土宗対策本部山北課長と協議し、現地救援活動の依頼を受ける。

◇ 近ブロ浄青塩竈理事長、執行部役員の皆様と協議し、すぐに各教区浄青で救援物資を集め現地救援基地に出発。

1月21日

◇ 救援物資配布　神戸市東灘区役所、御影公民館、小・中学校、阿弥陀寺

◎ 避難所での他宗の友人との涙の握手

◎ 土佐上人の被災されたお寺での出来事

☆ 避難所被災者の人に対するがんばれ言葉がかけれない状態で、『救援物資もって来ました』としか言えなかった。

☆ 草履足袋もない状態　次の日すぐにバイクで色衣等、お葬式ができるように届けた大阪の青年僧……先代のもので、それで良ったのかという悩み。

◇ ボランティア登録をする　何が出来るか、持っている物資等を聴かれた。

◇ 帰りに、歩いて生水上人と倒れている阪神高速の横を通り、芦屋の親王寺様にお見舞いによる。

1月23日

◇ 宗務庁に行って、浄土宗対策本部山北課長と協議し、復旧掘出しに人員派遣等の依頼を受ける。

◇ 兵庫教区対策本部長平井上人に電話にて連絡協議。

（神田）

(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p16-17

1月27日（金）	**西宮斎場・鵜越斎場での無縁仏回向** **伊丹市各寺院（法厳守・光明寺・正覚寺・大蓮寺・正善寺・西光寺）救援活動、お見舞い**
28日（土）	**西宮斎場・鵜越斎場での無縁仏回向** **武崎組　阿弥陀寺（本堂庫裡全壊）復旧作業** **内容：本尊・両大師・諸仏像搬出作業**
30日（月）	**西宮斎場・鵜越斎場での無縁仏回向** **灘組　西福寺（住職　伊藤省三師遷化）にて回向** **避難所お見舞い、その他寺院お見舞い**
31日（火）	**西宮斎場・鵜越斎場での無縁仏回向**
2月1日（水）	**須磨寺等にて無縁仏回向**

無縁仏回向

もっと早く気付いてするべきだった。僧侶として出来ることをもっと考えることが必要だった。（小林）

★

結論から言えば、もっと早く気付くべきだった。斎場は勿論、遺体の安置所へももっと早い時期に行くべきだったと思う。

しかし、正直言って全く思い至らなかった。僧侶として恥ずかしい限りである。（伊藤）

★

1月26・27・28日

◇ 救援活動

◎ 拝む活動　市では禁止、その現場での好意。

◎ 斎場での御回向

◎ 花の配布　お寺へお供え、芦屋真宗のお寺　西福寺回向。

◇ 浄土宗対策本部よりの依頼　お寺の掘だし、人員派遣。

2月1日

◇ 無縁の方の須磨寺遺体安置場での御回向

☆ 無縁の方のご遺体を拝む活動に入るが、安置所がどこに在るのかも情報が入らず、警察、県庁、区役所でも把握出来ていなかった。

◇ 鵤越での御回向を総本山知恩院有志の方にお願いしておったが、途中で行けないとの連絡が入った時、近くのお寺により帰られた。その時にそこの住職より「須磨寺の事などは、そこのお寺のお坊さんに任せておき、そんな事するより、他にしなければいけない事がたくさん在るだろうと、激怒されていた。」説明をして分っていただいたが、なかなか活動に理解が得られず、批判的な目にも合うことがあった。（神田）

各斎場での御回向

浄青が活動させて頂いた斎場は、神戸市の鵤越斎場と、西宮市の満池谷斎場である。芦屋市の斎場は機能していなかった。

この活動のきっかけは、1人の先輩僧侶のおかげである。彼が私の思いを聞いて、鵤越斎場に行って見ると、真言宗の僧侶が1人で御回願されていたので、早速、御一緒にお勤めさせて頂いたそうだ。直ぐに、連絡頂き活動を教えて頂いた。23日頃である。折しも、近ブロ浄青は嘉祿の法難念仏行脚と研修会で忙しく、ボランティアは何処かに置いていたのである。23～26日の4日間の救援活動の空白は、今考えると、とても大きな代償になったような気がする。

しかし、27日からは浄青として、鵤越斎場のボランティアに参加し、新に西宮市の斎場での御回向も始めた。ここは、浄青独自の活動の場であった。斎場の職員さんが、救援物資がここまで回らず、ひもじい思いをしておられると聞き、食べ物を届けたりもした。ただし、その費用は会員の自腹であった。

私は事務的な活動をしていたので、一度も斎場には行けなかった。少し残念だ。（山本）

★

斎場での御回向

1月31日　満池谷斎場御回向に参加

火葬のピークも過ぎ、かなり落ち着いて来た時期でもあった。遺族の雰囲気もかなり和らいでいた。地震後病気で亡くなられた方も何人かおられた。

弁当を職員の人に差し上げたが、結構喜んでもらったのが印象的でした。（大島）

2月1日　この日より3日まで、木村上人のご自坊西方寺様では、例年ならば三千礼拝行（仏名会）が行われるのだが、午前中は礼拝、午後は街頭托鉢に変更されていた。

それに随喜するため車で西方寺様へ向かうが、阪神高速池田線の渋滞により、6時間以上もかかってしまった。尋常でない渋滞の原因は、通行できる道路が限られていることと、被災地へ救援物資やボランティアの人達を輸送する車で、道路が溢れかえっていたことだ。けれども、なぜか不思議にイライラすることはなかった。

午後遅く寺に着き、私を待っていてくださった方数名と、早速電車で大阪梅田駅へ。寒風吹きすさぶ夕方、幟を立て鉦鉆を叩き、お念仏を唱えながらの募金活動。時々おつとめをし犠牲者のご回向をするが、実にさまざまな種類の多くの人達から浄財が集まった。（山中）

★

2月2日　西方寺様に泊めていただく。午前中に三百礼拝をすませ、1日に引き続き電車で大阪梅田へ。

この日は、阪神百貨店前の陸橋の上で、昨日同様に、通行人に募金を呼びかける。その後数名の兵庫教区の僧侶と合流し、駅前広場に場所を移して街頭托鉢。両日ともにかなりの額のお金が集まった。（山

中）

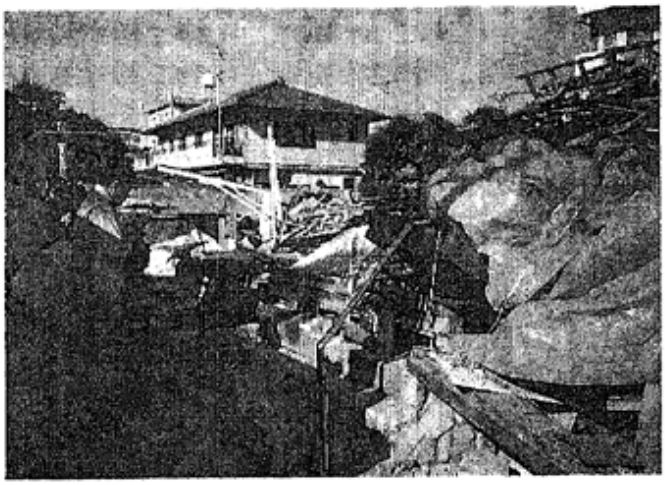
★

1月27日　私自身は遅ればせながら、この日早朝、初めて現場の「災害救援本部」基地としてご提供くださった尼崎市常楽寺様（浦上近ブロ副理事長ご自坊）へ。
本部では、まず当日集まった人達の救捜活動の割り当てがあり、いくつかのグループに分かれた。私達のグループは、現場に入ることを許可された車で、被災者の避難所をお見舞い、慰問。
満足なことは出来なかったように記憶しているが、とにかく今、どこで、何がどれほど（人材、モノ、情報）必要とされているのか、ようやく輪郭がうっすらと見えてきた感じがした。（山中）

大頂寺のお檀家さんにも神戸方面にお暮らしの方が沢山いらっしゃいます。連絡がなかなか取れず、安否が分かるまでは、かなりの時間がかかりました。
自坊のお檀家さんでも、この度の震災でお亡くなりになった方がいらっしゃいました。電話でお話しを伺い、火葬にはなさっておられたのですが、避難所生活でお困りでしたので、遺骨をお引き取りにまいりました。
その時、何か持参するものは、とお聞きしますと、カセットコンロのガスボンベが手に入りにくいとおっしゃたので、干したアジの開きとボンベを持参しました。新鮮なものは手に入らないとの事で大変喜ばれました。（土方）

★

川西市の木村上人の呼びかけで、有志数名が阪神青木駅に集まって、昼過ぎより神戸市内まで念仏行脚。
今更ながら、被害の大きさに慄然となってしまう。花や線香、お供え物などが手向けられてある倒壊した家並みのところどころで、亡くなられた人のために、おつとめ、ご回向をさせていただく。感きわまって、“南無阿弥陀仏”の声もとぎれとぎれになってしまう。
途中、親王寺・阿弥陀寺・西福寺様など被災された有縁の寺院にもお見舞い。つぶさに被害の凄まじさを目のあたりにする。1月27日に、車の中から半ば好奇の目で見ていた被災地のありさまや、この日電車の車窓から見た風景とは、随分異なった印象をうけた。
組織として政治的に動くことも勿論大切ではあるが、自らの足で一軒一軒お念仏を唱えながら歩いて巡ることが、やはり私達青年僧にはふさわしいし、待ち望まれているような気がした。念仏聖・空也上人のように。（山中）



西福寺

西福寺

(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p18-19

2月7日（火）　灘組　阿弥陀寺（庫裡全壊）、武崎組　阿弥陀寺復旧作業協力
8日（水）　灘組　阿弥陀寺、武崎組　阿弥陀寺復旧作業協力
灘区青陽東養護学校避難者（約1，000人）にレクレーションボランティア

被災寺院復旧作業協力について

重厚な本葺きの屋根、それを支える巨大な梁と柱。それ等が折り重なるように倒壊し、瓦礫の塊と化した本堂、庫裡。人の力だけでは手の施しようがない状態でした。

1月末から2月にかけて、片付けの為の業者の重機が手配できるようになってからは、重機の手配できる日時に合わせて、兵庫浄青会員・OB有志・近ブロ浄青有志が集まり、重機作業の間をぬって、手作業でご本尊、両大師等の仏像、什物等の掘り出し、搬出作業等のお手伝いをさせていただきました。

1人では、何から手をつけてよいのか分からない状態の中、多くの仲間と共に力を合わせて、復興への手がかりの作業ができるということは、大いに励まされることになりました。

しかしながら、地域全体が破壊されているという状況下では、重機の手配の日時も目まぐるしく変わり、人手を動員するのも困難なことではありました。

以下、実際のお手伝いの作業に必要と思われたものをメモしておきます。

☆服装

- ヘルメット……ご本尊救出の為には瓦疎の中へもぐり込む場合もある。
- ゴーグル・防塵マスク…瓦の下の土、壁土の量が膨大な為、土埃がスゴイ。
- 厚手の作業用手袋・作業用安全靴…解体作業現場での釘や割れたガラス等から手足を守ってくれる。

☆作業道具

- チェーンソー、のこぎり等……電気式では効率が悪いので、エンジン式のものがベター。ただし力が強い分、釘等も切ってしまい刃こぼれがあるので、目立て等も必要になる。キックバック等もあるので取り扱いは要注意。燃料（混合油）は、現場では調達しにくいので余分に用意のこと。
- ハンマー、バール、剣スコップ、角スコップ、鉄製の熊手等……倒壊した本堂、庫裡から仏像、位牌、書籍等を手作業で取り出す時に使用。
- クリッパー…… 配線コードの切断。（ペンチ、ニッパーでは役不足）
- 一輪車…… 運搬用。
- ブルーシート、ロープ……雨天の時、まだ掘り出されていない什物等を守る為。

- 段ボール……什物、書籍等の仕分け、保存。

☆その他

- 携帯電話……現場での予定変更、複数現場での動員人数の振り分け等の連絡に力を発揮。予備バッテリーは充分に。
- ウェットティッシュ……手ふき用、現場では、基本的に水が使えないものと思うこと。
- 食料・飲料水…手弁当、水筒持参が原則。（現場に迷惑をかけない）
- 交通手段……車は道具を運ぶ為だけのものに限定。道路は、災害復旧の為の交通規制がひかれており、一般車両は通行不可のところが多い。また大変な交通渋滞の為、移動手段としては用をなさない。バイクが便利。ただし、瓦礫等の搬出の為、道路に釘等が散乱し、パンクしやすいので注意。（生水）

第2次救援活動として28日の西宮阿弥陀寺の復旧作業に協力した。初めて現場に入り、西宮市役所を訪ねたが混乱の中、ボランティアの受付が行われていた。個人のボランティアが集まって、大きな力となって救援活動が動き始めていることを実感した。

阿弥陀寺では、全壊して手付かずの状態からご本尊を始め仏具等の搬出を手伝った。

この初期の段階としては、まず生命線の確保。次に心情の安定への働き掛け。復旧作業協力等、直接的な活動が要求される。二次災害という危険も孕んでどこまで出来るかという点が難しいところである。

今回は地理的に便利がよかったので、近ブロ主体で大勢の協力が得られたのであるが、遠隔地の場合、そうも行かないのでは無かったかと思う。事実、住職の身で4－5日泊まり込みでボランティアをという気持ちはあっても、スケジュールがだめであった。（榎本）

★

有意義な活動をさせて頂いたと思う。倒壊した本堂の屋根を破って内部にもぐり込み、本尊様を引き出す。しかしひとつ間違えば自分の命も危ない。作業中は感じなかった危険性を今になって思う。できれば専門家（建築業者）を監督にして行えば良かったのでは。

また重機（クレーン、ユンボ等）の活躍が目立ったが、一般の解体ではできない細かい掘り出し作業が中心になるため、浄青会員の比重が大きかった。ただ工具などは会が準備しても個人的な物（ヘルメット、防塵マスク、皮手袋、安全靴等）は確実に個人で用意する必要がある。（小林）

★

寺院復旧作業について

当時私は、兵庫浄青の一単位ブロック「和順会」の会長であったため復旧作業のボランティアを頼む立場にあった。和順会は武崎組内の一浄青である。会員の中にも自坊を被災したり、檀信徒を亡くされたり、また自らも瓦礫の下に埋もれ生死の境に立たされたものも多い。その中にありながらも、尚他寺の復旧作業にかかわり、泥まみれになったものも多い。それらの会員にボランティアを何度も頼む連絡を入れるのは、大変つらいことだった。

場所の急な変更も多く、また解体当日の朝、人手を頼まれることもあった。

個人的なことだが、雨の日の復旧作業ほ、何故かしら物悲しくつらいものがこみあげてきた。（高倉）

寺院復旧作業
大変危険な作業をして頂いたと思う。
今回のボランティア活動全般に関して言えることだが、万が一事故があったときの保償等は今後の課題である。（大島）

★

正直言ってかなり無茶な事をしてしまったような気もするが、今回のように寺院の本堂が全壊してしまった場合、業者による解体に任せてしまえば最も大事な本尊、その他を喪失してしまうことにもなりかねないので、やはり必要な作業であったようにも思う。
問題は、またもし同じ様な災害が起った時に同じ事が出来るかどうかである。（伊藤）

★

交通状況について
震災直後、段々と交通状況が変わり救援活動で移動することが困難になってきたある日のこと、自坊を朝6時ごろ出発し、名神高速に入り中国道に入った瞬間突然全く前の車が動かなくなってしまい5～6時間過ぎたのです。昼の12時になっても全く動きません。やっと夕方6時ごろ動きはじめて「救援基地」に到着したのは、夜の9時ごろでした。いくら混雑していても3時間ぐらいで到着するところを15時間もかかりました。距離も滋賀の甲賀から兵庫の尼崎までは約100kmほどです。
何時間かかっても、何日かかっても、何年かかっても、知恩院をはじめ皆様からいただいた善意の救援物資を「救援基地」まで届けようとその時思っていました。その後どこかで、いつかはだれかのお役に立っているものと思っています。（前田）

(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p20-21

2月9日（木）　灘区青陽東養護学校レクレーションボランティア
10日（金）　灘区青陽東養護学校レクレーションボランティア
12日（日）　第1回阪神・淡路大震災災害救援本部委員会（尼崎・常楽寺）
14日（火）　武崎組　来迎寺（本堂全壊）本尊・仏具搬出作業
15日（水）　灘区青陽東養護学校レクレーションボランティア
武崎組　来迎寺解体復旧作業
16日（木）　灘区青陽東養護学校レクレーションボランティア
武崎組　来迎寺解体復旧作業
7日（金）　灘区青陽東養護学校レクレーションボランティア

青陽東養護学校

水・木曜日にレクレーションボランティアとして、昼は子供と遊び、夜は映画や落語を催した。また心のケアとしての活動も考えた。

カラオケ大会やミニ運動会もした。それぞれ良い活動だったと思う。

そこで、少し裏話をしよう。

ある夜、学校の廊下で女性が泣いている。お声を掛けると大丈夫だとおっしゃる。それでも心配になってお話をすると、「不眠症なんです、大丈夫です。もうすぐ主人が仕事から帰って来ますので……」と言われる。それならばと失礼した。次の週もまた泣いておられる。相変わらず眠れませんかと聞くと、「ええ、でも、もうすぐ主人が帰ってきますので……あっ、帰ってきました、それではこれで……」と、その時は全然不思議に思って無かった。すごく恰幅のいいご主人だった。数日後、自治会の役員さんから彼女のご主人は震災で犠牲になられたことを聞いた。あの日私が遭ったあの男性は誰だったのか、未だに良く判らない。ただ、被災地には沢山の幽霊が出たそうだ。

ある日、体育館に入ると山積みになった毛布などの救援物資をボランティアが仕分けをされていた。夜寒くてね、と言っていたおばあちゃんを思い出した。自治会会議に出席して毛布のことを言うと、1人に1枚当たらないと配れないという。1，500人に対して1，300枚しかないので配れないんだと言う。体育館倉庫に入ると、インスタントラーメン、チーズ、缶詰等が山ほどある。これもまた同じ理由で配られないのか。秩序ある共同生活をしていく為には、犠牲と無駄はつきものなのか。毎日放送からラジオが100個届いたが、同じ理由で配れない。浄青が持ってきたことにして、子供達にプレゼントしたら、まだ60個程残った。自治会に言うと、残りは捨ててくれという。結局、ボランティアに配った。これでいいのかな。何処かおかしいと思う。

避難所から出て、家に帰ると、もう行政からの食事の配給がもらえない。

3家族と一緒に1つの教室に入っていた身寄りのないおじいちゃん、10日後に1人廊下で寝ていた。

生活ボランティアで入っていたある団体、人数が増えすぎて収集つかず、夜中に酒盛りしたり、恋に花を咲かせたり、何を考えてんの、いい加減にしろ、本当に。

まあ、色々あった青陽東でした。（山本）

★

灘区の避難所（青陽東養護学校）にて、コーヒー、紅茶　などの炊き出しに参加し、感じた事を書かせていただきま　す。
時期は、震災から約1ケ月後、行政からの配付食料も安定し、とりあえずパニック状態は過ぎていました。
避難している方々に、少しでも和やかなひとときを持っていただけるようにと、喫茶店のようなものを校庭に用意しました。
寒い時でもあり、暖かい飲み物は好評でありました。そして本来の目的としては、その場でお互いに会話が始まり、出来れば私達も話し相手にならせてもらえればと、願っていたのですが……。
結果、何割かの方々とはお話しが出来ましたが、殆んどの人は受け取るとそのまま部屋に帰ってゆかれました。
しかし、後日避難所の代表の方より、次の様な御意見をいただく事がありました。『あれでいいんですよ。避難所内で一番コワイのは、ここに居る人同士が争う事、または非協力的な関係になることなんです。「今日はコーヒーの炊き出しが有るぞ！」「あんたの分持って来てあげるから……」という会話が、こういう場では必要なんです。共通の話題、そしてホッと一息つける話題がとてもいいんですよ。』と。
活動中は不慣れなボランティア活動に戸惑うばかりでしたが、先のような言葉に励まされながら、続ける事が出来たように思えます。
しかし、住居が倒壊し、避難所にて大変な御苦労をされている方より、先のようなボランティアへの励ましのお言葉までいただけた事は有りがたいことであり、また今から思えばもったい無いことと感じております。（森）

落語のボランティアに行った時は、こんな状況でお笑いなんて不謹慎かとも思ったが、実際に行ってみると、いかに笑いに枯渇していらっしゃるか、口を開けば地震の事ばかり、たとえ一時でも頭を空にし忘れられる事ができることによって、また新しい発想や解決策が生まれてくるのではないだろうか。（土方）

★

他の活動についても同じ事が言えると思うが、とにかく初めての経験であった。
今日までの浄青活動の中で行った事のない活動をした訳であるが、やはり常日頃行った事のない活動を行うと言う事は難しいものだと痛切に感じた。炊き出しについては、資金と人員さえ揃えば、有る程度未経験であっても行えるが、心のケアといった部分は、やはり難しいものがあった。
災害の被災者に対してのみではなく、弱者に対する活動の精神を、常日頃から養っておくべきであろうと思われる。（伊藤）

★

いつ行っても学生ボランティアの笑顔は見られなかったのに対し、浄青グループは笑いの渦（被災者を巻き込んだ）だったと思う。私達にストイックさが足りなかったのか、関西人の乗りだったのか。善悪は別として、避難所での炊き出しの楽しさは災害を忘れ、ボランティアを忘れ、料理を作る喜び、食べてもらう喜び、笑って、楽しんでもらうだけだったように思う。
多くのやり取りのなかで、避難所の人とのつながりができることがうれしかった。様々な場所で行った

が、終わる度に次は何を用意しようと考えていた。この炊き出しを含む避難所・被災者への救援活動は、人間を相手にするので難しいが色々な活動の中で一番やりがいがあった。
　また子供達が逆境のなか、元気に外で遊ぶ姿を見て心がなごみ、励みになった。（小林）

★

　青陽東養護学校にて
　落語会は結構喜んでもらえたと思う。子供達が予想していたよりも明るかったのにはほっとしました。
　被災者の人から『我々は生かされているんやとわかった』と逆に言われた時は悔しかった。こっちから言いたかったのになぜか切り出せなかったのです。（大島）

　青陽東養護学校レクレーションボランティアに参加
　2月15・16・22・23日、3月2・9日
　当時、大阪浄青会長の山本師からの依頼により、レクリエーションボランティアに参加させて頂きました。子供達にはサッカー、ゲーム等。大人には落語、映画等行わさせて頂きました。
　震災から1ケ月程たって、初めて神戸に行きましたが、マスコミ等の報道通り、街全体が異様な雰囲気でした。また被災者との接し方を多少教えて頂きましたが、いざとなればなかなか話ができなかったというのが正直なところでした。
　また夜遅く帰宅する時、武庫川、神崎川、淀川と川を渡るたびに街が明るくなり、梅田のホームに降り立ち、そこで酔っ払いを見た時には、何とも言えない気持ちになりました。たった1ケ月程で、世の中がこんなにかわるものかと驚かされました。（羽田）

★

　一般ボランティアと一緒に活動
　炊き出しは、はまるのである。準備等は結構大変なのである。例えば焼き鳥の炊き出しを考えると、ガスボンベ、焼き鳥用コソロのレンタル、タレを浸けるパット、タレ、鳥肉、くし、軍手、机、椅子、紙皿、お手拭き等を人数分用意して、車に詰め込み被災地へ行くのである。用意をして焼き上がる頃には、多くの方々が並んでおられる。順番に焼き鳥をお渡しすると、皆さん口々にお礼を述べられて行く、「ありがとう」「すんませんなぁ」、気がつくと被災者のおじさん・おばさんが、手伝ってくれている。何処からかビールがまわってくる。避難所で一時の笑顔がこばれ、笑い声が響く。はまるのである。また来ようと思う。
　青陽東養護学校で喫茶の炊き出しをした。コーヒー、紅茶、ココア、昆布茶の宅配である。心のケアとして被災者とお話しようと思っても、避難所になっている各教室は、生活の場であり、ボランティアが入り辛い。
　そこで喫茶の注文を聞いて廻るのである。その時、被災者の方にお声を掛けたり、お話を聞いたりする。また注文を届けた時も、お茶を飲んでホッとしてお話されたりもした。まさに一石二鳥なのである。
　炊き出しはとても楽しいのである。（山本）

(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p22-23

2月18日（土）　毎日新聞社災害救援センター『阪神大震災こども救援金』へ
全国からの義援金の内500万円を寄付

20日（月）　灘組　西福寺復旧作業
内容：本尊・両大師・諸仏具搬出作業

21日（火）　灘組　西福寺復旧作業
内容：諸仏具搬出作業

22日（水）　灘組　西福寺解体復旧作業
灘区青陽東養護学校レクレーションボランティア
灘組　光明寺復旧作業

23日（木）　灘組　西福寺解体復旧作業
武崎組　法性寺宮殿搬出作業
灘区青陽東養護学校レクレーションボランティア

西福寺さんの掘り起しの時は、お寺にあったチェンソーが活躍、田舎寺院の備品が役立った。
西福寺さんの時は、パワーシャベルが大活躍、やはり重機のすごさを感じる。お寺の横の筋を一山片付けるだけで1日かかったが、そのことによりその奥まで車が入れる様になった。今回の地震ではっきりした事だが、搬入路・道路の確保がいかに重要なことか末端の路地でさえ結果が出た。
しかし、当時そんな道路は各所に見られ、それだけに復旧の苦労が偲ばれる。
西福寺では近ブロより青年会のメンバーが大挙参集したが、各々ジャージや繋ぎ服と云ういでたち、奥様も大変驚かれていたようだった。あの地震後の状況で顔の知らない若者が、沢山でお寺を掘り返している状況は、被災者の立場では少し不安になったのではないだろうか。しかし、法衣で行くわけにもいかず、仕方がなかっただろう。（土方）

★

灘組　西福寺様復旧作業応援のため、平井奈良浄青事務局次長と常楽寺様を経て現場に行く。
各教区から集まった近ブロ浄青会員と一緒に、過去帳など重要品の掘り出し。ヘルメットや安全靴、手袋、防塵マスクや防塵メガネを用意してやっていても、私達素人ではなかなか思う様にははかどらず、一体何をしにやってきたのか、と思う事もあった。（山中）

寺院復旧作業
浄青の災害救援本部会議で救援活動の対象を色々と話し合った時、寺院救済と一般の救済の2つの意見に分かれた様に思う。結局は二面性を持って行うことに落ち着いた。被災寺院とその壇家信徒の救援と救済、一般の被災者の心のケア（炊き出し、レクリエーションボランティア等）である。
さて、この活動は非常に危険なものであった。屋根が傾いたり、落ちたりしている中に入り、御本尊や仏具を掘り出すのであるから、今考えれば向こう見ずな行為であった。けれど殆んどの御寺院の阿弥陀様

等を救出させて頂き、また誰も大きな事故に遭う事もなく、皆無事であったのは、まさに仏様のご加護のもとであったと思われる。

石材店の方々がボランティアとして参加してくれたり、重機をレンタルしたりした活動もあったが、この活動には全国の義援金を使わず行った。（山本）

★　全浄青募金チラシ　★

★　毎日新聞　1995年（平成7年）2月19日（日曜日）　★

この義援金については非常に取扱いが難しかった。どの範囲まで使っていいのか、またどの程度使っていいのか。救援金と活動費どこまで区別するのか。組織は資金があって動けるものであると思う。組織論と合わせて今後解決すべき問題だと思う。

しかし、全国からあれだけ多くの義援金が集まったことはありがたいことであり、各教区浄青会員の意識の高さが如実に現れた結果ではないだろうか。（小林）

★

義援金については、まずその前にプールしておくべき基金について考えたい。

救授物資搬入についての資金は、結果的に各教区より寄付して頂いた訳であるが、事務局は当時、近ブロの別途会計からの支出を考慮していた。しかし、当然の事ながら別途会計から出すのは疑問が残る上、理事会に諮ってからでなければ決められない性質上、緊急の場合に使えない。ブロックや教区単位でプールしておく必要が有るだろう。

本題の義援金については、かなり集まったと思う。災害の規模から考えれば決して多いとは言えないかも知れないが、浄青

の義援金募金以外に多くの機関によって募金が行われていたことを考慮すれば、多かったと言って良いと思う。逆に、使い道についてもっと精査すべきであったのではなかろうかと言う思いが強い。元々義後金の使い道を決めずに募集してしまったために、中途半端な使い方をしてしまった様な気がする。義援金の使い道をある程度決めておく必要があるのではなかろうか。かと言って、自らの手を縛ってしまうのも問題であるので、難しい問題だと思う。募金方法も場当たり的であったと思う。

全国からの募金の振込先を大阪浄青の口座を利用したこともその一つであったが、あの時点では他に良い方法が見つからなかったのも事実である。やはり、常時義援金の為の口座をブロックなり教区なりに持っておく必要があると思われる。そして、その口座に常に一定以上の資金をプールしておき、緊急時にはそこから支出し、またそこへ義援金を集めると言った方法が良いのではなかろうか。全国浄青の救援基金と競合してしまうかも知れないが、今回の様な緊急時を想定すれば、各ブロック若しくは教区にも救援基金と、その為の口座をおいておくことが望ましいと思われる。（伊藤）

★

義援金について

約1，900万円の義援金が全国から全浄青災害救援本部に送られた。托鉢で集められたもの、自坊の賽銭箱のお金、子供さんのおこづかい、チャリティゴルフでの募金、飲み会でのカンパ等、色々なお金が送られてきた。

大事にしようと思った約1，500万円のお金を、救援金と活動費に使わせて頂いた。けれど、一つだけ声を大にして言わせてほしい。活動に参加した青年会会員の食事代と交通費は、殆んど皆自分で出している。もしこれを活動費として義援金に置き換えて加えれば、総額2，000万円以上の義援金になるだろう。

これは、理事長神田さんと本部長塩竈さんと私とで、一番最初に決めたから、それがボランティアとして当たり前だと思ったから。御免なさい、そして素晴らしい活動をありがとう。3人を代表して今更ですが申します。

それから一つの事実として、千葉浄青の義援金を、木更津郵便局の窓口の職員が着服していたことが発覚した事を、また刑事事件にまでなったことをあえて記しておく。（山本）

★

義援金について

各教区会員を始めたくさんの方々にご協力を頂いて、予想以上の成果をあげられたと思う。

郵便局での不祥事は残念な事件であったし、入金に対する確認方法は今後の大きな課題である。

今回救援規定の改正で、救援センター本会計から活動費を拠出できるようになったのは大きな収穫でした。（大島）

(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p24-25

2月24日（金）	**灘高等学校　うどん炊き出し（奈良浄青中心）** **武崎組　西蓮寺（本堂全壊）、灘組　西福寺復旧作業**
28日（火）	**武崎組　西蓮寺復旧作業**
3月1日（水）	**灘区青陽東養護学校　炊き出し**
2日（木）	**灘医青陽東養護学校　コーヒー、紅茶、ココア、昆布茶等**
8日（水）	**武崎組　親王寺（本堂全壊）復旧作業** **（知恩院・神奈川浄青・兵庫浄青中心）**
9日（木）	**武崎組　親王寺復旧作業** **（知恩院・神奈川浄青・兵庫浄青中心）** **灘区青陽東養護学校レクレーションボランティア**
10日(金）	**武崎組　親王寺復旧作業** **（知恩院・神奈川浄青・兵庫浄青中心）** **長田区若松公園　炊き出し（ぜんざい、コーヒー等）（京都浄青中心）**
16日（木）	**第5回理事会・第2回救援本部委員会（大阪教区教務所）**
27日（月）	**仮設住宅向け日用品の提供（京都浄青中心）**
29日（水）	**仮設住宅向け日用品の提供（京都浄青中心）**

★　日用品の仕分け　★

★　日用品配布　★

明日（24日）の神戸市灘高校グランドでの奈良浄青（手打ちうどんの炊き出し）のための下ごしらえに、朝から田原本教安寺様へ。

教安寺様（里見多聞住職）のはからいで、浄青会員ばかりでなく、教安寺様の檀信徒、寺の近所の人、浄青OB・その家族、果ては田原本町水道局の応援もあったようだ。そのことに対し、大友奈良教区長からの激励までも頂戴した。

うどん粉をこねたり、自分で作ったうどんを湯がいて試食をしたり、みんな慣れないことばかりで大変ではあったが、和気あいあいのうちに得難い体験をさせていただいた。（山中）

★

3月29日　2月24日の（手打ちうどんの炊き出し）に引き続いての第2弾、（カレーライスの炊き出し）のために、早朝より灘高校グランドへ。

（うどん）での経験が生かされ、なるべく無理・無駄・ムラを省こうということで、（うどん）の時よりも（カレーライスの炊き出し）は、比較的要領よくやれたようだ。しかし、その分ありがたみは薄らいだ……？（山中）

地震から何カ月も経って日用品を配布しなければならなかった状態、そして2年近く経った現在の被災地を思う時、国の行政の在り方に強く疑問を感じてしまう。

自助努力と言っても限度があり、職も家も全て無くした人々に、何を努力せよと言うのだろうか。（伊藤）

★

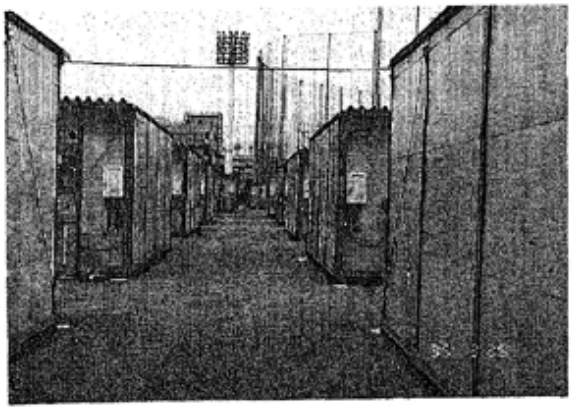
仮設住宅への用品配布

「身一つで避難所を出て生活できるのだろうか」の発想から出たこの活動は、確かな手ごたえがあった。

これは各寺院方のご好意で提供していただいた品々を、種類別に仕分けし、仮設住宅へ行って配るのだが、結構な手間と労力がいる。また種類が多く、仕分けが大変であるが、喜んでもらえる顔を見れば、また次回へと思う。

3日間かけて仕分けたものが、ただの1時間で全部なくなってしまったほどに、物が（お金が）なかったのであろう。たった2回だけの活動だったが、もっとしたかった。

ただ一教区だけでは提供される品々に限りがあるので、もっと他教区とも連携をとってした方が良かったように思う。（小林）



★　仮設住宅　★

★　用品配布　★

(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p26-27

【京都浄青】
仮設住宅向け日用品無料配布について
＜活動報告より一部抜粋＞

配布する相手は？

　基本的に最近までの普通の生活をしてきた人達であり、たまたま震災にあったため、この様な状況になった事を認識し、相手のプライバシーや意見を尊重することが必要。必要なものは買えばいいというが、現在の仮設住宅は1年で出なければいけないため、無駄な出費は避けたい。しかし日常の生活に不便を多く感じている。

　仮設住宅に入ったからもう援助は必要ないという意見が多いが、食事や救援物資の配布など、多くの不安をもって生活し、仕事がなく、お金の入るあてがない人が多い。

　個人的には若干のプライバシーはあるが、避難所の方が生活に楽なのではと思う。あくまでも私達と同じような生活をしてきた人達であることを理解する。

教区内の物資搬入及び仕分けの場所の設定

1. この作業には多くの人員が必要となるため、駐車スペースの確保が必要。
2. 搬入、搬出のため、車の乗り入れの便利な場所を選ぶ。
3. 仕分け作業には広い場所が必要となるため、場所の設定には期間も考慮する。

物資の内容

1. 新品であることが最低の条件だが、何10年前の新品は困る。
2. 募集する品目をある程度限定する。ただしこんな物が、と思う様なものが必要とされている場合もある。
   （例えば、お盆・傘・風呂敷）
3. 京都での物資
   鍋（両手・片手）、やかん、フライパン、和洋食器、コップ、寝具、タオル、石鹸、洗剤、傘、お盆、食品（砂糖・油・醤油）、電気製品（オーブントースター・電気鍋・ポット・電気スタンド）など。
4. 現地での需要
   鍋、やかん、各種電気製品、寝具など。

収集方法

1. 役員会にて決定ののち、依頼状を各組幹事宛に郵送。後に教区内全寺院宛にハガキにて提供のお願いをする。
2. 集まった物資は一旦開封し、内容を確認後、種別に分類しておく（箱のまま）。

3. 種別に梱包するが、この時により細かく分類する。
（例えば、鍋→セット、両手、片手、フライパン、特殊鍋＜おでん鍋、天ぶら鍋＞）
4. 梱包には別に購入した段ボール箱を使用。また箱には内容と大まかな数量を表示する。これは大きさがそろいトラックに積みやすいためと、配布の時の混乱を防ぐ（ただし、再使用は不可能に近い）。また1つの種類は2個以上に梱包する。
5. 多くの人数を必要とするが、配布する場所の数によってある程度セットして積み込むために、実際に現地に行く人間が把握しながら仕分け、積み込み作業を行う。
6. 思ったより時間がかかるため、余裕をもった作業計画が必要。
7. レンタカーは早めに手配しておく。

配布

1. 事前に目的の市対策本部（仮設住宅課）に連絡し、情報を集め配布先を決定する。
   ◇ 各市対策本部の連絡先
   神戸市　078－332－8181
   西宮市　0798－35－3151
   芦屋市　0797－31ー2121
2. トラックが大き過ぎると通れない道が多く残っているため注意。
   ◇京都では2トンロングのパネルトラックとワゴン車（ファーゴ）2台使用。
3. 現場ではハンドマイクで案内する。こちらの身分、目的を明らかにする。
4. 一度に全部降ろして配布すると混乱するので、適時に降ろすこと。
5. ブルーシートを購入し、その上に物資を広げ配布する。シートは土禁とする。
6. 箱のまま配布する（新品であるという安心感）が、箱がいらなければ回収するし、一旦家で開けた後、箱はまた持って来てもらい、こちらで処分する。
7. 配布中、話しかけなどのコミュニケーションをとり、なるべく不公平が起きないようにする。
8. あくまでも貰って頂くのだと認識し、現地での作業を行う。
9. 最後に残った物は全て持って帰る。空き箱、ごみなど。

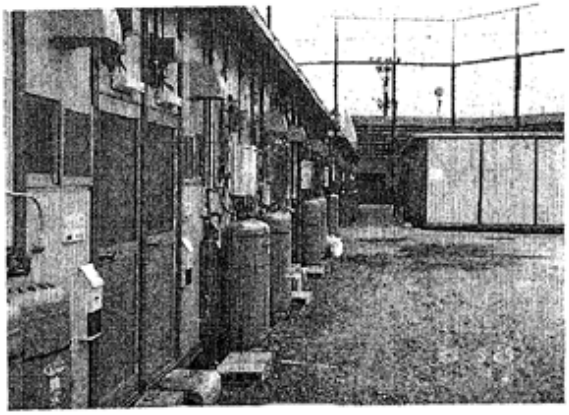
その他・反省点

1. 種別が多過ぎて仕分けが難しかった。
2. 情報収集や連絡が遅く、現地で混乱した。
   ◇ 目的地の仮設住宅が工事の遅れで入居しておらず、 行く場所を現地で捜した。
   ◇ 先にボランティア団体に搬入した際の話と、現地での話に違いがあり、先の団体に渡した物に必要な物が多かった。
3. 一種類1箱では、先と後で不公平が生じる。量の少ない物でも分けて梱包する。
4. なるべく1人が多く取らないよう注意する。
5. 天気によっては日時を変更する必要がある。
6. あまり大きな仮設住宅では混乱が起きる可能性があるため、慎重に場所を選定する必要がある。
7. 帰宅する人の多い夕方に活動するのがいいのでは。
8. 各所の仮設住宅で事情も違い、また各市での事情も違うため、それぞれに現場にて判断し対応する

ことが必要となる。できれば事前に仮設住宅へ行き、何が必要なのか等の情報収集や配布活動の案内が出来れば望ましい。

9. こちらの対応に敏感に反応するため、言葉などに注意する必要がある。
10. 浄土宗の活動である事をもっとアピールするべきだった。浄土宗カレンダーや宗の発行物も一緒に配るほうが良った。（特にカレンダーが。これは宗務庁に連絡すれば1週間程で入手可能）

以上の主な点を列記したが、様々な情報で混乱するし、また人が相手の活動だけに、充分に注意して行うことが大切だと思う。でも喜んでいる顔を見と本当にホッとする。多くの仮設住宅で今現在も不自由な生活をしている事を思えば、もっと何かないかと考える。ただ色々な救援活動の中の一つの方法として、この活動は有効なのではと思う。



★　仮設住宅　★

★　用品配布　★

(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神・淡路大震災救援活動記録 : その時浄青は / 近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"編 - 発行:長崎 : 全国浄土宗青年会, 1997.6. 請求記号:震災-7-233. p28-29

4月6日（木）　平成7年度第1回理事会・第1回救援本部委員会（浄土宗宗務庁）

22日（土）　第2回救援本部委員会（ホテル・ニューアルカイック）

5月13日（土）　灘区　西福寺境内『母の日（花まつり）フェスティバル』
内容：追善回向、おでん、ざるそば、フランクフルト、ポップコーン、たこ焼き、あてもの等屋台設営、花束プレゼント

16日（火）　神戸組　東極楽寺　追悼写経会（写経と読経回向）

西福寺檀信徒各位

花まつりフェスティバル開催のご案内

春暖の候
突然のお手紙失礼申し上げます。私共は、此度の阪神・淡路大震災でご遷化された西福寺住職伊藤省三上人の後輩で組織している兵庫教区浄土宗青年会であります。
信仰の導き役としてのご住職を失い、更には依り所となる本堂等の伽藍をも失い、又檀信徒様におかれましても多大な被害を受けられ大変な日々をお過ごしになられていることと推察申し上げます。震災後、既に４ヶ月近くが経過し、復興への道を模索されていることと存じます。
当会といたしましては、震災以後、救援物資の配給・避難所での炊き出し・被災寺院の御本尊等の搬出の救援活動を行ってまいりました。その活動の一環として、この度、皆様とともにひとときでも心の安らぎと楽しい時間を共有いたしたく、西福寺奥様、並びに法類総代光明寺ご住職のご了解をいただき、「母の日（花まつり）フェスティバル」を企画いたしました。
つきましては、公私何かとご多忙のこととは存じますが、ご家族ご一緒にお越し下さいますよう、ご案内申し上げます。
合　掌

西　福　寺
内室　伊藤　慧子
光　明　寺
住職　小栗　賢亮
兵庫教区浄土宗青年会
会長　生水　康昭

記

日　時　平成７年５月１３日（土曜日）
午前１１時～午後３時頃まで

会　場　東灘区魚崎　浄土宗西福寺境内地

企　画　全国浄土宗青年会救援センター災害救援本部
（担当 近畿ブロック浄土宗青年会）

内　容
・被災によりお亡くなりになられた諸霊の個別回向
・花まつり法要、お話、ビンゴゲーム
・母の日花束プレゼント
・あてものの屋台
・おでん、うおそうめんの屋台
・フランクフルト鉄板焼きの屋台
・飲物の屋台
・たこやきの屋台

※本部において食べ物、飲み物、花束などの交換券を発券致します。
※すべて無料です。

4月22日（土）
尼崎市アルカイックホテルにて、近ブロ浄青救援委員会が開催され、民谷奈良浄青事務局長と一緒に出席。宗からおりてくる金銭の取り扱いについていろいろな意見が出される。

つまるところ、救援のありかたについての相違ではないかと考える。私達の浄青の素晴らしいところは、お金をもらって何かをするのではなく、私達自身がお金を出し合い、自分達のお金で、誰にも縛られることなく、自由に活動をすることができる点にあると、私は思っていたのだが……。
宗が浄青の救援活動を評価してくださるのはありがたいと思う。けれどもそのことによって、宗が私達浄青を利用してはいないか、私達浄青も宗の言いなりになってはいないか、浄青の独自性が損われたりしてないか、これらのことは議論に値すると思う（所詮、宗のお金も私達が属している寺から出たものなのだが……）。（山中）

★

復興フェスティバルなど
災害の規模からいって致し方なかった事ではあるが、どうしても一面的な活動に偏ってしまった様な気がする。
一般の炊き出し活動と比べてどこが違ったのか、本当に寺院、若しくは地域の復興への手助けになったのだろうかと言う疑問も残り、単なる自己満足に終わってしまったのでは無かろうかと言う不安が有るのも事実である。（伊藤）

★

神戸　西福寺にて
伊藤上人のお寺で賦やかに開催できることはとても良かったと思う。ここでも子供達は元気でした。でもここに参加してくれた人達はいいとして、その他の人達のことがとても気になりました。
（大島）

★

母の日フェスティバル等の復興フェスティバル
御寺院棟とその檀信徒様の救援活動としては一番てっとり早くて、うまく行く方法だと思う。またボランティアしているほうも、非常に楽しめるのでよい。（山本）

和歌山教区からは花束をプレゼントすることになった。御坊市から白浜町にかけての紀南地方は花の生産農家が多く、事情を説明した所、惜しみ無く協力して戴き、カーネーション、かすみ草、スターチス、ガーベラ等が集められ、現地へ運び会場にて花束作りをした。
ある農家では、代金を取ってくれず、「せめてこれくらいのことをさせていただきたい」と無償で提供して戴いた。申し訳無くも思ったが、お気持ちを素直に頂戴することにした。
この様な例は、物資調達や救援托鉢などの折りに触れ、感じた所である。（榎本）

★

炊き出しとフェスティバルについて
近ブロ、各ブロックの特色ある活動方法には特筆すべき点が多々ある（例えば、花一つにしても、ゲーム一つにしても）。ただ、目的をはっきりと確認し、時期を逃さないことが大切である。
炊き出しをするための炊き出し、フェスティバルのためのフェスティバル等は、会員にとっては大きな

負担となる。（高倉）

★

　やはりお祭りは楽しい。たこ焼き、おでん、当て物、飲み物等と皆さんに楽しんで頂き、自分達も楽しむ。また近畿6教区の浄青がそろって行動できたことは素晴らしいと思う。
　震災当初は多くの場所で炊き出し等があったが、2～3カ月もすると姿を消した。そんな中で寺院を中心としたこの活動は、地域住民の方（檀信徒）への励ましと支援に繋がっていったのでは。
　会話の中「まだやってくれるの」「まだ覚えててくれたの」等があり、救援活動を続けて行くことが必要と実感した。（小林）

(c)1997近畿ブロック浄土宗青年会救援委員会ボランティア実行委員会"JIVA"
(デジタル化：神戸大学附属図書館)